

お前は、この世界へ生れて来るかどうか、よく考へた上で返事をしろ

(芥川龍之介 『河童』)

「せーのっ」

三人はびたりと声を合わせ、身を屈める。

『オムライスっ!』

弾けた声は、夏空へ高らかに上っていった。その先で海鳥が空をたゆたっている。視界の端にそれを取めながら、二人の少女が夏の彩りに満ちた海へと飛びこんでいく。残った一人の少女はすう、と息を飲み、「いくよ、特型駆逐艦」と一人きりの言葉を胸に宿した。

「今日はどれがいいかなあ……」
陽に焦がれた小麦色の身体を滑らせ、少女が往く。人の身でありながら身にまとった存在証明——艦装の面影は物々しく、しなやかに海を躍る体躯との対比が、そのまま少女の存在感の象徴であった。

伊号第401型潜水艦。かつてこの海原に艦体を泳がせた海の中の艦、その名を背負った少女の澄んだ目は、近海に出現した異形なる存在、深海棲艦の姿を遠く映していた。

「吹雪ちゃんは何がいい?」

「デミグラス系……かな?」

「ほうれん草のホワイトソース……かりかりベーコントッピング」

「ゆーちゃんやりおる」

「昨日の晩から考えてたので」

「しおいちゃんは？」

「ここはケチャップが手堅い」

吹雪型駆逐艦一番艦の吹雪が海原を駆けながら、あるいはUボートIXC型のU・511ことユーが海中を深々と泳ぎながら、場違いなランチ談議に花を咲かせていく。

のどかな少女たちの会話とは裏腹に、三人が相対しようとしている状況は、決して穏やかではない。

「雷撃で仕掛けるの、どうかな。しおいちゃん」

会話の片手間で艤装同期確認を取るしおいに、吹雪が語りかけた。

脚部にまとった魚雷発射管の稼働を確認し、手に携えた十二・七センチメートル連装砲を持ち直す吹雪が何を思いか、しおいは真意を探ろうとする。

「いきなり？」

「牽制してる暇、ないかなって……」

言葉尻を濁す吹雪に、しおいはコンタクトレンズ型のディスプレイである統合情報処理膜に映される数々の情報から、改めて戦況を読み解く。

太陽がいよいよ本格的に空気を熱する頃、四国は高知県の南西端、柏島に駐留していた

しおいたちの元へ、《皇》から出撃要請が入ったのが十分ほど前のことだった。

太平洋から豊後水道へと至り、瀬戸内海深くへ侵攻すると思われる深海棲艦、リ級とネ級の二隻を遊撃するべく、しおいたちは柏島を発した。ちょうど北上する二隻の東側から強襲する形だ。

わずかではあるが、既に目視で二隻の姿を捉えている。会敵まであと数分とない。

彼我戦力は優位とまではいかないが、慢心せず、過度の緊張で心を固めず、冷静に対処すればならぬ問題は無いはずだ。

だが、それを瀬戸内海という内海ゆえの因果が邪魔をする。手頃な沿岸部に狙いを付けられる前に、足を止めなくてはならない。

「速攻でカタを付ける、か」

「どうかな」

I I P F が輝く点、線、面、文字として視界の中に灯す戦況を精査し終え、しおいは唸った。

「うん、私は吹雪ちゃんに賛成。……ゆーちゃんは、どう思う？」

しおいが右舷方向へ視線を流す。青く煙る視界の先で泳ぐユーは、専用のダイバージャケットとダイバースーツで厚く身を固め、雪のように白い顔だけを露出させていた。腰に

まとった鎧のような艦装を操り、音もなく黙々と海中を滑る姿が、しおいとは対照的だ。「ユーも賛成です。早めにこちらへ注意を引きつけた方がいいかなって……重巡二隻の追撃は、少し厳しいかもしれないけど……」

低空飛行ならぬ、低深度遊泳——そんな印象を覚えるユーの声が、一度途切れた。

「大丈夫です。三人なら……401遊撃艦隊なら、大丈夫」

強くはない、けれどはっきりとした輪郭のある言葉だ。ユーがそんな言葉を放つ機会はそう多くない。それだけにそれが、ユーの確かな感情を物語っていた。

しおいは微笑みで応えると、深い蒼に染まる正面を見定めた。天候は快晴、ちらちらと海面からこぼれ落ちてくる陽の光が無数の帯となり、しおいの針路を明るく照らす。この天気ならば、恩恵も最大限に受けられる。

「まず、私が雷撃します。続けてゆーちゃん、吹雪ちゃんは射角を左舷に二度ずらして二発ずつ雷撃して」

「そのあとは……どうしますか？」

「臨機応変かなあ……とにかく、沿岸部への侵攻と攻撃の防止を最優先」

「いつもどおりってことかー」

「よろしくね吹雪ちゃん、ゆーちゃん」

二人の返事の陰で、しおいは艦装から最後の肯定信号が返ったことを確認する。

ハンドシェイク完了、艦装同期に問題なし。IIPFの正常動作、無線の正常稼働にも抜かりはない。

気負う必要はなかった。ユーの言うとおり、自分たちは401遊撃艦隊だ。鎮守府から離れることを許され、瀬戸内海を縦横無尽に守る火消しの艦娘たち。自分はその旗艦なのだから。

「右舷五度！ 伊401、雷撃開始します！」

肩から懸架する魚雷発射管を構え、しおいは魚雷を二連射した。それに続いて、吹雪、ユーの発射管からも魚雷が吐き出される。深海棲艦たちの深海周波を感知し、音なく海中を切り裂いて猛然と飛びかかっていく。

海を貫く魚雷たちを追って、しおいとユーが海中を疾駆し、吹雪が海面を疾る。

IIPF上の輝点が示していた艦影は既に肉眼でも色濃く、ネ級のあとを行くリ級が、冷たい眼光をしおいたちに突き立てた。

感情のない視線を引き継ぐように、リ級とネ級が魚雷群へと砲を浴びせた。一発、二発と爆ぜた海面が微塵と化す。水柱が夏の空へと一文字に伸び、霧散していく。数発の魚雷が誘爆したが、残りの魚雷たちはそれをものともせず二隻へと殺到し、喰らいついた。

海中が爆ぜ、海面に一瞬の紺碧が広がると、深海棲艦の前に水の壁が打ち立てられていく。天を突く飛沫が吹雪の頬を濡らす隣で、しおいは二隻の動向を伺う。

「リ級、足を止めました」

「ネ級は?!」

「ダメ、ダメ!」

吹雪の叫びを証明するように、ネ級の針路にぶれはない。ただ幕進していくだけの様が一層不気味さと呼び起こす。後方でリ級だけが防御態勢を取り、水飛沫の狭間から恨めしい眼を射おいたちに向けていた。

一隻だけで足止めするつもりか――。

「ネ級が早いよ、しおいちちゃん」

「ゆーちゃんはネ級を追って! 吹雪ちゃん足止めおねがい!」

「いっくよー!」

言うなり吹雪はにっと笑んで、連装砲を高らかに天へと掲げる。左手を砲塔に添え、眼を閉じる吹雪の立ち姿は堂々と、頑なまでに凜と伸びた背筋は、戦場に立つ場違いを一切感じさせない。

「――御名をもって奉る」



口元からこぼれた言葉が海へと落ちる。言葉は海と溶け合い、一体となり、絡み合った言の葉を解するように、海は自然に抗う動きを始めた。さざめき立った海面から伸びる二つの筋が吹雪を幾重に包み、天へと至る龍のごとく、光となって吹雪の左手へと導かれていく。

「顕現せよ、命名結象——《吹雪》！」

見開かれる眼と口、そして砲口から世界へ放たれた言葉が「かたち」となって顕れるのは同時だった。砲弾は言葉をまとい、意味を抱き、具象と化して空を裂く。吹雪は砲弾が追う遠い異形の背をじつとにらむ。

直撃ではなかった。だがそれで何も問題は無い。

砲弾は炸裂を引き起すことはなく、代わりの「それ」を解放する。膨張した空気が一点に凝集し、刹那の虚が生じる。直後、空間を弾くように爆発的に広がり、四方へ荒れ狂い、それは「吹雪」へと変貌した。

大雑把な半球を描いて吹き荒れる風雪の猛威は、場違いな極寒を伴って一帯を凍えさせ、季節の摂理を捻じ曲げて、自由奔放に暴れ回った。

海面が凍てつき、南海の湿気をも氷結させる。それはネ級とて例外ではなかった。凍結していく海は瞬間にネ級へ至り、動きを封じこめてみせる。忌々しくもかくネ級の黒い

眼に、苛立ちめいた灯が光った。

「ゆーちゃん！」

しおいの一声でユーは速力を一気に上げ、針路をネ級へと向ける。海水をぐんぐんと裂いていく最中、ユーは一息に身を縮め、右手を払う。脚部に触れた指先が軽やかにある象形を描くと、筆跡は輝く光跡となって脚先に灯った。

「駆けて、馬より早く——《エオー》！」

一際強い光を放って光跡が消滅する。ユーは縮めた身体を弾かれたように伸ばし、海水を強く蹴り飛ばした。ユーの細身が強烈な加速を見せ、通常の倍近い速力をもって海を割っていく。

ネ級目掛けた襲歩のごとき突進——ユーが得意とするルーン魔術、馬を象徴するルーン、《エオー》の顕現だった。

「がんばれ、ゆーちゃん」

魚雷のように蒼の奥深くへ消えていったユーを見送り、しおいはリ級へ意識を集中する。三百メートルほど先のリ級は態勢を整えているらしく、肉眼で捉えた海上の吹雪が叫ぶ。

「リ級、砲撃来るよー！」

「挟撃します！回避！」

しおいは左舷へときりもみに回転し、深く潜航していく。吹雪も右舷へと針路を切り、二人の航跡がYの字を描いて回避機動を取る。リ級が放つ重い砲撃が海面を吹き飛ばしたのはその直後だった。

砕けた海の破片がばらばらと吹雪に降り注ぐ。砲撃をいなす体捌きの合間に砲を構え、眼光と共に砲弾を数発、迫るリ級へと見舞った。

砲弾がリ級の周囲を蹴散らし、一発がリ級へと命中する。砲と一体化した巨大な両腕でしのごり級の勢いに一切の衰えはない。吹雪は「まーそうだよね……」と苦笑いに、左舷から進撃してくるリ級と距離を取る。

「やっぱり雷撃くらい当てたいな」

退きながらばやく吹雪に、海中からしおいが声を覗かせる。

「私、やっていい?」

「旗艦さんに譲るか、ここは」

「よっし、んじゃアシスト、よろしくね!」

大きく輪を描いて距離を取ったしおいが、吹雪を追うリ級の背面へと雷撃を放つ。呼応するように吹雪は振り返り、脚部の魚雷発射管を駆動させる——リ級の速度が増したのはそのときだった。

「あ、吹雪ちゃん!」

「んもーやだー!」

吹雪の主機が濛々と飛沫を吐き出し、強烈な加速でリ級から退く。しおいの雷撃を間一髪で避けたリ級が、雷撃で生じた水柱を背に吹雪へ迫る。

「っ!」

リ級の砲口がもたげられる寸前、吹雪は左手を掲げると、一息に海面に叩きつけた。言葉を伴わぬ命名結象の効力は幾分減少するが、それでも吹雪に離脱の暇を与えるには十分だった。

氷結した海面がリ級の脚にがっちりと喰らいつく。その隙に全速で後退した吹雪は、リ級へと容赦のない雷撃を見舞った。

吹雪の足元から二本の航跡が走り、雷の勢いでリ級へと穿たれていく。防御も回避もできないリ級の足元が凍てついた海面ごと弾け飛び、爆発的に海中からあふれ出る衝撃波がリ級を貫く。リ級の装甲と氷が散り、空に舞った。

湧き出た飛沫が濃霧と化し、リ級の姿を一瞬覆い隠す。IIPFが映す情報では、まだリ級は沈んではいない——砲を油断なく指向し、吹雪は動向を見守る。

案の定、まもなくして漂う霧が晴れると、リ級は身体を引きずるように、一歩進み出た。

ぎこちなく身を屈めたのは、破れかぶれの突進をする予備動作——だが。

「これでおしまい！」

耳を貫いた一声に、吹雪は息を吐く。その目が捉えた光景は、まさに一瞬だった。

リ級が身を屈めると同時、片足が海中へと没した。リ級が脚先に視線を走らせる間に、もう片足に海中から素早く腕が伸びる。

海中へ脚を引きこまれ、姿勢を崩したリ級の眼下、海中から跳び上がったしおいがリ級の身体を軽々と踏み台にし、流れるように肩口へと駆け上がる。

「やあっ！」

勢いのままにリ級を蹴りつけ、鮮やかに宙を返るしおいが大腿部の対艦ダガーを引き抜く。リ級の頭上へと飛びこむと、回転にしなやかな身体のばねを相乗させ、逆手に構えたダガーを首元へ鋭く一閃した。

もはやリ級に事態を飲みこむ間などなかっただろう。深々と穿たれた対艦ダガーに、リ級が身悶えする。

十秒ともたず、リ級はしおいを肩に乗せたまま、完全に沈黙した。

海中から音なく忍び寄り、海中に引きずりこんでの接近戦を仕掛ける暗水格闘あんすいかくとう、そこから海面へと跳び上がったの水上格闘——潜水艦娘ならではの攻撃機動、美しさすら覚える

一部始終を目に焼きつけた吹雪は、リ級から飛び跳ねるしおいを前に砲を下げた。

「おつかれ！」

夏のように笑いで、しおいは吹雪とハイタッチを交わす。弾んだ音が、夏空に弾けた。

吹雪の命名結象の力はやはり圧倒的だった。そこにユーのルーン魔術、《エオー》の恩恵が相乗すれば、彼方にいる敵艦への肉迫など容易い。

魚雷の射程距離感覚は、IIPFを見ずとも身体が覚えている。脇目も振らず猛進するネ級の背を、ユーの眼は逃がしはしない。

「《ソエル》……刻印開始」

艦装が、魚雷発射管の内部でルーンの刻印を開始する。単なる文字の焼きつけに過ぎなくとも、ユー自身の素質を宿す艦装は、それ自身が魔術の発動機のようなものだ。

やがて《ソエル》のルーンが刻まれた魚雷が装填されると、ユーは力強く言い放った。

「魔術弾頭《ソエル》、Feuer！」

発射管から解放された四本の魚雷が、待ちかねたと言わんばかりにネ級目掛けて疾駆した。海を貫き、飛び、忠実な餓狼のようにネ級へ群がる魚雷たちが、次々と炸裂する。

それは単なる炸裂ではない、強烈な閃光の柱だった。周囲に屹立した太陽のごとき光柱の洗礼が、ネ級の装甲を焼き、焦がしていく。

さしものネ級も、ソエルの猛威には堪えかねるらしかった。背後に迫るユーを憎々しく振り向きざま、腹部の砲塔からでたらめに砲弾を吐き出す。

「守って、茨の壁——《ソーン》」

炸裂より早く、虚空から出現した茨たちが壁となり、ユーを守る盾となって砲弾を防いでいく。ユーの回避運動が相乗し、ことごとくを無力化されたネ級がにわかに狼狽する。

「逃がさないよ」

砲撃の余韻が消えぬうちに、一瞬で刻んだ《カノ》のルーンを掴み、ユーは指先を正面へと一気に走らせた。

灯火を象徴するルーンが顕現し、淡い火種が生じる。燃え盛る炎の柱へ一瞬で変じると、炎は海を駆け、ネ級に立ち塞がっていく。ユーもまた、炎を追ってネ級の前面へと躍り出た。

しつこく食い下がる狼のごときユーと炎の壁の前に、ネ級は転進する。

ユーの追撃が留まることはない。扇状に再び放たれた《ソエル》の魔術弾頭がネ級の眼前で炸裂し、閃光の柱が夏空へと立つ。

退路を断たれ、針路を閃光で塞がれたネ級に行き場はない——はずだった。不意にネ級が閃光へ飛びこんだかと思うと、身体を灼く光をもとせせず、ユーへと突進を仕掛けてくる。

「ゆーちゃん！」

声のするほう、ネ級を振り返ったユーの眼に映ったのは、極寒の吹雪に襲われるネ級の姿だ。続けて飛びこんだしおいの魚雷に速力を封じられ、足を止めたネ級は迂闊だった。

空間を暴力的に打ちすえる雪の礫に、海が凍てつく。ネ級が氷に閉ざされ、頑強な装甲が脆さを露呈していく。

確かに生じたネ級の間——ユーは海面へと跳び上がると、間を置かずネ級へと突撃していく。

ネ級の半身は絶対の冷氣に封じられたが、それでも黙することはないらしい。

身体を軋ませながら砲塔をユーへ突きつけると、ネ級は今際の砲弾を放った。破れかぶれの砲弾にまともな狙いはなかったが、そのうちの一発がユーを掠め、装甲を削り取る。構うことなく突進するユーの顔に一切のうろたえはなく、素早く払った手でルーンを空に刻んだ。

「撃て、猛牛のごとく——《ウル》！」

虚空を裂いたルーンを左の掌中に収め、あふれ出る魔力の奔流を右腕へ叩きつける。なけなしの砲撃を前にしても怯まず、勇猛なまでの勢いで距離を詰めたユーを、ネ級は止めることができなかった。

「やああああああああっ！」

走りの加速と全体重、そして《ウル》のルーンで臂力を増した拳が、脆くなったネ級の装甲を紙のように撃ち貫いた。金属が歪む鈍い音が響き渡り、身体に風穴を開けられたネ級が全身で絶叫する。

やがて、深々と懐に身体を埋めるユーへもたれて、ネ級は動かなくなった。

「大丈夫?！」

ネ級の残骸からユーが腕を引き抜く。背後から駆けてくるしおいと吹雪の姿があった。ネ級の砲弾が掠めたことに対しての言葉を、ユーは平然と受け止める。

「はい……問題ありません」

淡々と述べるユーの耐久値が少しずつ回復していく様を、しおいはIIPF上に呼び出したユーのバイタルで確認し、ため息を吐く。

「あのねゆーちゃん。何度か言ってるけど、ゆーちゃんはそういう能力があっても、沈まないってわけじゃないんだから。無茶はダメ」

ほんのりと言葉に怒気を混ぜたしおいの前に、吹雪が視線を右往左往させる。

「ほら、ゆーちゃん、しおいちゃんに一言言ってあげないと……」

しおいと吹雪、二人の咎める目を前に、ユーは視線を二人の間で泳がせた。間を置いてうなだれるなり、「ごめんなさい……ご心配をおかけして」とユーの小柄が一層縮こまる。

「まあ、無事でよかったよ」

しおいがさっぱりとした笑顔でユーに向けた。

「ひゅ……」

「でも?」

頭を傾げる二人を前に、ユーはしばしもじもじと海面を眼でなぞった。やがて意を決したかのように顔を振り上げ、ぐっと強い眼差しで訴える。

「オムライス、早く食べたいじゃないですか」

二人は少し考えこむと顔を見合わせ、そのあと無言で、強く深く頷いた。